

基金ホームページ URL ● <http://www.jkcf.or.jp>

発行 財団法人 日韓文化交流基金  
〒105-0001 東京都港区虎ノ門5丁目12番1号  
虎ノ門ワイコビル3F  
電話 03-5472-4323 FAX 03-5472-4326  
発行日 2009年1月6日

## 第9回日韓文化交流基金賞

日韓文化交流基金では、文化および芸術分野の交流を通じて日韓両国間の友好親善に寄与した韓国人の功績をたたえるため、1999年に「日韓文化交流基金賞」を創設し、毎年1回日韓文化交流基金韓国訪問団の答礼晩餐会の場で表彰しています。このたび第9回（2008年度）授賞式が、8月27日にソウルのロッテホテルで行われました。今年度の受賞者は、金容雲氏（韓日文化交流会議座長）、李承信氏（孫戸妍記念事業会理事長、ギャラリー・ザ・ソーホー代表）、李始東氏（社団法人釜山韓日交流センター理事長）に決定しました。



### 受賞者プロフィール



金容雲 (キム・ヨンウン)

1927年生まれ  
韓日文化交流会議座長

日韓両国の文化比較に関する著書や講演活動を通じて、日韓関係の重要性を訴えてこられました。1998年からは日韓/韓日文化交流会議の韓国側副座長、2003年からは座長を務め、2006年からは「日韓交流おまつり」の韓国側実行委員長として行事を成功に導くなど、両国間の文化交流および相互理解の増進に大きく貢献されています。



李承信 (イ・スンシン)

1949年生まれ  
孫戸妍記念事業会理事長  
ギャラリー・ザ・ソーホー代表

短歌の歌人として名高い孫戸妍氏（1923 - 2003）は、日本で4冊の歌集を出版、宮中歌会始に陪聴者として招かれるなど、高い評価を受けています。李承信氏は孫氏の長女として、「孫戸妍短歌研究所」を運営し、孫氏の作品を韓国で翻訳・出版し、短歌の魅力を伝えるイベントを行うなど、短歌を通じて日本文化の理解と、日韓の相互理解の増進に大きく貢献されています。



李始東 (イ・シドン)

1946年生まれ  
社団法人釜山韓日交流センター理事長

1994年の韓日文化センター（現・釜山韓日交流センター）設立以来、日韓大学生デザインフォーラムをはじめとする各種の青少年交流や文化事業など、多彩な交流事業を推進されてきました。また、2002年からは日本留学フェアなど留学関係の事業を積極的に実施し、わが国への韓国人留学生の誘致にも大きく貢献されています。

# 日韓文化交流基金懇談会 講演『「ポスト韓流」の日韓文化交流』(要約)

9月10日に日韓文化交流基金懇談会を開催し、小倉紀蔵先生の講演『「ポスト韓流」の日韓文化交流』を行いました。

## 韓流とは何なのか/ 何だったのか

日本の歴史上、「韓国に学ぶ(ルック 코리아)」という運動が時々起きています。最初は日本という国を作るとき、韓国や韓国系の知識人を經由して、中国の文化や制度を学びました。二回目は、江戸時代に朱子学などを取り入れたときです。三回目は、西暦2000年くらいから、日本の社会でかなり大々的に「韓国に学ぶ」という運動が起きました。日本で、「失われた10年」を克服しなくてはならないのに政治が停滞し、自信を失っていたそのときに、朝鮮半島では第一回の南北首脳会談が行われ、「動く朝鮮半島」対「動かない日本」という図式で多くの報道がなされました。経済や社会の分野でも、韓国の負の側面より、劇的な変化が肯定的に紹介されていました。

その延長線上に「韓流」というものが起きた、というのが私の考え方です。「韓流」というのは彗星のように現れた「ペ・ヨンジュン」や「冬のソナタ」によって、突然嵐のように吹き荒れたことは確かですが、日本人の心の中に、韓国は日本より「いい国」なんじゃないか、という漠然とした思いが形成さ

れていたから、2003-4年あたりの「韓流」に火がついたのではないかと思っています。

もうひとつ、「時代思想の交換」というのは非常に大きい。プレモダン(前近代)、モダン(近代)、ポストモダン(脱近代)という三つの時代思想が、今アジアの中でぐるぐる回転している。ヘーゲル的な一直線の歴史が成り立っているわけではありません。私の考えでは韓国はポストモダン社会ではありませんが、一見そう見える部分があります。日本人と韓国人は、相手の国に行ったときに自分の国と同じだ、とよく言いますが、それは周回の違いによるもので、ポストモダンやモダンのあり方が全然違っていても、一見同じように見えてしまうために、お互いに幻想を抱いたり誤解を抱いたりします。そういう時代思想のズレや誤解が、魅力の源泉になっていると思うんですね。

「冬のソナタ」の有名なせりふで、「あなたが道に迷ったら、空にポラリス(北極星)がある」というのがあります。しかしこれは儒教的な危険な考え方でもあります。『論語』で、政治をする上で一番重要なことは何か、という問いに、君子は北極星になるべきだ、北極星になれば、自分は動かなくても回りの人が自分を中心にして動くのだ、と言っています。

日本ではあまりにポストモダンが長くなって自由で無秩序になってしまったのに嫌気がさしていた。そのときにポツと現れて、とても優しく、押し付けがましくなく「僕がポラリス(不動の中心)ですよ」と言ってくれたペ・ヨンジュンにみんな吸引されたのは、ある意味で当然だと思います。そういうものの語り方で、日本において「韓

流」というものが始まったわけです。

「愛」という概念も、「ポラリス」と同様に、両面性があって危険なものでもあります。韓国の「愛=サラン」は、身近な親兄弟から恋人、地縁、血縁関係に広がっていき、最終的には地球にまで広げることができる儒教的な同心円の概念で、それこそが韓国のパワーの源泉でもあります。

「サラン」は包容的な概念でもありますが、「ナム(=他人)」に対する非常に強い排他性というものも同時に持っている。韓国社会には強力な排他性というものがあって、自分たちの愛の通じる領域と通じない領域をはっきり分けていますが、そこでニヒリスティックにならずに、必ず愛は通じるはずだ、と、どんどん愛の同心円を押しひろげようとするところに韓国人のダイナミズムがあるわけです。

## 韓流と日本の モダンへの回帰

韓流の流れと、日本の保守政権による「ポストモダンからモダンへの回帰」というのは、ある程度リンクしていた、というのが私の考え方です。「韓流」は、日本人が小泉元首相に熱狂したのとある程度一致しています。主体性を持った人間がこの日本社会にもほしい、ということです。主体性とは、近代においては理性に基づいていますが、ポストモダンの時代には、理性に対する不信感というものが渦巻いています。理性的な主体として、「ぶれない」という同じ言葉で小泉元首相とペ・ヨンジュンの両方を賞賛したとき、日本社会と日本人は、ある人物像、ある世界観を求めているのだと思います。



講演では、「韓流」の背景が東アジアの思想から解き明かされた



日本国憲法というものは、日本国民の持つ価値の内容に対して権力はコミットしてはいけない、という考え方をしています。こういう憲法は、特に東アジアにおいては多くはありません。もし憲法改正をして、国民が持つべき価値について明記するとすると、日本は東アジアの中の一特殊ではなくて、東アジア的な一国家としてその中に埋没することになります。あとはその価値がどれだけ正しいかという、東アジアの中での価値の競争になり、中立的でメタな立場を日本は保てなくなるわけです。

東アジアには内戦が終わっていないという意味の「地雷」がまだあるんですね。中国も、朝鮮半島も「地雷」があり、それをまだ誰も踏んでいないのに、その前に歴史認識問題などで決着をつけるということはできないわけです。「地雷」があるからこそ、東アジアはまだ日本国憲法のようなものを持って、国家が特定の価値を肯定したり否定しなくてはならないわけです。

## 韓国の民主主義の「実験」と性善説

2008年の春から夏にかけて、韓国のソウル市庁前で米国産牛肉輸入反対のろうそく集会が盛んに行われました。初期の段階では、一般の市民が休日に公園で家族の団欒・レジャーを楽しむかのように、子連れで三々五々集まり、李明博大統領にノーと言ったりした。もちろん、自分たちが選んだばかりの大統領に完全にノーだと言ったのですから、反民主主義的です。しかし、それは西洋式の民主主義に対する根本的な疑問を突きつける、東アジア

的な新しい民主主義の実験だったと考えることもできるのではないかと、と思っています。

ろうそく集会は、一説によると女子中高生の携帯電話での呼びかけから始まったとされています。選挙権を持たない若い人たちというのは、西洋式の民主主義では「目に見えない」人たちです。しかし、儒教的な考え方の根本には、年齢でその人の言っているものの価値を区別せず、正しいことを言った人が上に立つべきだ、というものがあります。例えば、儒教社会の「科挙」にトップで合格すると、若くして政府の重要ポストにつけるわけです。その背景には性善説があります。

日本人にとって東アジアがわからない根本は、日本人が儒教の性善説を理解できないことにあります。全ての人は生まれたときは100%善だという性善説の思想は、実は非常に厳しい身分上昇・下降を説明する思想です。性善説は、元来全ての人は善なのに、その道徳性を発揮できない人間は社会的に転落してはならないという、革命を合理化する思想です。その精神が今でも韓国では生きています。

では、日本人も韓国の「民主主義の実験」を見習うべきなのか、「ルック 코리아」すべきなのか。そうではないでしょう。日本人というのはやはりアニミズムの伝統が非常に強くある。むしろその伝統から、日本型の新しい民主主義をつくるべきだと思います。

## 「東アジア共異体」の中心は韓国に

反面、中国や韓国や北朝鮮の人も、おそらく日本のことはあまり理解でき



支援委員である「日韓交流おまつり」への質問に、日本の祭りが韓国で大喝采の様子を語った

ない。中国と韓国ももちろん違います。ということは、ヨーロッパにおけるキリスト教や西洋近代思想のような共通思想を基盤とした共同体をつくるのは、なかなか難しいのだらうと思います。共同体を目指しながらも、「共で異なるけれど何かのまとまりはあるのだ」という程度の「東アジア共異体」という認識の方がいいと思うんです。

その中心は、日本でも中国でもなく、韓国に置くべきだと考えています。日本が中心になるとしたら、他の国の嫌悪感が強いだろうし、中国に中心を置く場合には、中華文明圏的なヘゲモニーの強化に奉仕する共同体でしかなくなってしまいます。そういう意味では、韓国が一番いいんですね。そして韓国は、新しい社会改革の実験をして、今一番動いている場所です。

その一方で、韓国は、経済の規模からも、政治社会的にも、もう十分自信を持っていいはずなのに、東アジアという大国ばかりの地域に位置しているために、自国の実力を過小評価する傾向がある。あるいは逆に高い自己評価を強調しすぎることもある。もう少し韓国の人に自信を持ってもらって、自分たちも中心的な役割を果たすべきなのだという自覚を持っていただきたい、と私は考えています。

# 「日韓交流おまつり中高生交流プロジェクト」招へい。

日韓国交正常化40周年を記念する「日韓友情年2005」のイベントとして2005年より開催されている「日韓交流おまつり」が、4年目となる2008年もソウル市庁舎前広場および清溪川広場で9月27日・28日の2日間開催されました。当基金では「21世紀東アジア青少年大交流計画」の一環として、「日韓交流おまつり」に参加した日本と

## 県立山梨園芸高等学校（山梨県）、山南高等学校（忠清北道）

※山梨県と忠清北道は、1992年姉妹友好関係締結

### 郷土芸能：すいれき太鼓

山梨県立山梨園芸高等学校すいれき太鼓部が取り組む山梨県笛吹市の伝統芸能「御坂神楽太鼓」を基礎とした創作太鼓。同部は学校と地域の共生、生徒への伝統文化の理解、学校再生を目的として10年前に発足した。学校の所在地は農業が盛んで収穫を祝う祭りが多く、「すいれき太鼓」にはこれらの祭りを表現する内容が多数取り入れられている。



7/8 (火) ~ 7/15 (火) / 7泊8日

外務省、県副知事、教育長表敬  
山梨園芸高校訪問（授業参加、太鼓練習など）、ホームステイ  
「日韓交流おまつり2008in山梨」にて公演、富士山、河口湖、ジブリ美術館見学など



すいれき太鼓の合同練習

9/23 (火) ~ 9/30 (火) / 7泊8日

忠清北道行政副知事表敬  
山南高校訪問（すいれき太鼓練習など）、ホームステイ  
道内見学（りんご狩り、キムチ作り体験など）、ソウル近郊見学（オドゥ山統一展望台、景福宮など）、おまつりにて公演



忠清北道行政副知事表敬

### 感想

日本側

●心から楽しもうという気持ちになって最高の演奏になった。帰り際に涙が止まらず泣いていた韓国生徒。胸が痛んだ。この8日間、私にとって宝物になったと思う。

韓国側

●日本訪問で本当に多くのことを学んだ。協調する姿勢とお互いを配慮する気持ち、集中する時は集中するということが。  
●韓国の伝統文化を日本に伝えるという大きな責任をともなって日本に旅立った。そんな私たちに日本人々は皆親切にしてくれた。この思い出は一生記憶に残るだろう。  
●日本の太鼓を学ぶすばらしい機会を得られたことは本当によかった。

## 県立南砺総合高等学校平高等学校（富山県南砺市）、春川実業高等学校（江原道平昌郡）

※富山県南砺市と江原道平昌郡は、2002年「地域活性化に資する交流協力に関する議定書」締結

### 郷土芸能：五箇山民謡（こきりこ、麦屋節、五箇山追分）

民謡の宝庫である富山県南砺市の五箇山の代表的な民謡。こきりこを手にした女性と、さらさらを打ち鳴らす男性の踊りが対照的な「こきりこ」、平家の落武者が五箇山に逃れてきたという伝説を民謡にした「麦屋節」、峠を越えるときに唄われた「五箇山追分」。太鼓、笛、尺八、三味線、胡弓それぞれの音色と踊り手の動きや表情から、五箇山文化の一端が感じられる。



7/25 (金) ~ 7/29 (火) / 4泊5日

県教育長表敬  
平高校訪問（芸能発表など）、生徒宅（世界遺産合掌造り）でホームステイ  
五箇山和紙すき体験、金沢市内見学（兼六園など）



世界遺産合掌造りでホームステイ

9/26 (金) ~ 10/1 (水) / 5泊6日

おまつりにて公演  
春川実業高校訪問（授業体験など）、ホームステイ  
春川市内見学、ソウル近郊見学（水原華城、韓国民俗村など）



春川実業高校訪問の様子

### 感想

日本側

●日本語の大変上手な生徒がいて、日本の文化を積極的に学ぼうとする姿勢に感心した。  
●日本と韓国の各地から集まった出演者と心をつなげて歌ったり、踊ったりしたことで、国境や言葉の壁を越えた文化の絆が生まれた。

韓国側

●交流会や合掌造りでの懇親会など、きめ細かく準備されており、大変楽しく過ごすことができました。9月に春川高校に迎える際は、負けないくらいの対応をしたい。  
●同じ10代ということもあってお互いに好きな物や関心がある話題も似ていた。外国人だからといって緊張する必要はないのだと感じた。

# 派遣事業

韓国の青少年の相互訪問の事業に対し、「日韓交流おまつり中高生交流プロジェクト」\*として支援を行いました。

\*韓国の中生 10 名程度をおまつりの前に日本へ招へいし、郷土芸能などの文化を学んだ後、9 月のおまつりに日本の中生が韓国を訪れ、訪日した韓国の中生とともにおまつりに参加し交流するもの

## 県立下関中等教育学校（山口県）、晋州外国語高等学校（慶尚南道）

\*山口県と慶尚南道は、1987 年姉妹提携

### 郷土芸能：平家踊り

平家が壇ノ浦の戦いで滅亡した後、壇ノ浦で入水した安徳天皇の霊を慰め、平家一門を供養するために始まったと伝えられている。先帝祭の花魁道中とともに、下関市の由緒ある踊りとして有名である。三味線、音頭、太鼓、踊りが一体となって醸し出す力強いエネルギーは、関門海峡に渦巻く潮流のうねりに喩えられる。



8/19 (火) ~ 8/25 (月) / 6泊7日

県教育長表敬

下関中等教育学校訪問（茶道体験、平家踊り練習など）、ホームステイ馬関まつり「平家踊り総踊り大会」参加、下関市内見学（赤間神宮など）、秋吉台、萩市内見学（松陰神社など）、山口市内見学（雪舟庭など）、萩焼絵付体験、大内塗体験など

9/23 (火) ~ 9/29 (月) / 6泊7日

晋州外国語高校訪問（授業参観など）、晋州国際大学校訪問、中東高校訪問、ホームステイ晋州市近郊見学（海印寺、晋州城など）、ソウル近郊見学（景福宮、国立民俗博物館など）おまつりにて公演



市庁前広場での公演の様子

感想	日本側	<ul style="list-style-type: none"> <li>●お互いの考え方、文化的背景を理解し、尊敬し合うこと。これは個人間では実現が可能だとこの夏私は知った。これが守れたら国家間の争いも消えるに違いない。</li> <li>●テレビや新聞の情報と実際の現場は大きく違うこともある。だから自分の目で見て接することが大事なのだと、このたびの訪韓で思った。</li> </ul>
	韓国側	<ul style="list-style-type: none"> <li>●これから日本語や日本文化など、日本のいろいろなことを一生懸命勉強して、もう一度日本に行きたい。</li> <li>●親切が身につけていて、約束の時間も、すごいと思うくらい自然にきちりと守る日本人。多くのことを学ぶことができた。</li> </ul>

## 県立国見高等学校（長崎県雲仙市）、求礼高等学校・求礼農業高等学校（全羅南道求礼郡）

\*長崎県雲仙市と全羅南道求礼郡は、2007 年姉妹結縁締結

### 郷土芸能：国見よかよか

長崎県雲仙市所在の県立国見高等学校の教諭や生徒たちによって創作されたオリジナルの郷土芸能。雲仙市の特産品として有名なイチゴやメロン、多比良ガネ（ワタリガニの一種）などの農海産物や、国見高校の名を全国にアピールしたサッカーなどが歌詞の題材として取り入れられている。



7/14 (月) ~ 7/19 (土) / 5泊6日

市長表敬、歓迎レセプション

国見高校訪問（授業・部活体験、郷土芸能練習など）、ホームステイ平和公園、長崎原爆資料館など見学

浴衣で記念撮影（ホームステイ先にて）



9/24 (水) ~ 9/29 (月) / 5泊6日

求礼郡守表敬

ホームステイ、求礼高校・求礼農業高校訪問（合同授業、施設見学など）、郷土芸能の合同練習、おまつりにて公演



韓国の生徒から歓迎の迎えを受けた

感想	日本側	<ul style="list-style-type: none"> <li>●お互いの国の文化などに違いはあるけれど、同じご飯を食べて同じ屋根の下に寝て、話をしてお互いに気持ちを伝え合って理解し合えるのも大切なことの一つだと分かった。</li> <li>●大変なのは通訳の方が帰った後からだった。その時に役に立ったのは世界共通語である英語だった。英語学習の必要性を痛感した。</li> <li>●国見よかよかの振り付けと一緒に練習したが、意外と早く覚えてくれて楽しく踊ることができた。</li> <li>●韓国の友だちもたくさんできた。友好関係に国境はない。韓国人たちの温かさや親切さを知った。こういった国際交流が増えればいいと思う。</li> </ul>
	韓国側	<ul style="list-style-type: none"> <li>●漢江の岸辺で踊りの練習をし、市庁舎前で公演をしたことは、絶対忘れることのできない記憶となるだろう。</li> <li>●毎日が楽しく、愉快的日々の連続であった。別れが近づくと、何とか少しでも多く話をしよう日本語の会話の本を見ながら努力した。</li> </ul>

# 多彩な青少年交流事業—委託事業の紹介

「21世紀東アジア青少年大交流計画」の一環として、当基金が社団法人ガールスカウト日本連盟、社団法人日韓経済協会、財団法人青少年国際交流推進センターへ委託をした青少年交流事業が7月から8月にかけて実施されました。

## 日韓ガールスカウト交流事業（社団法人 ガールスカウト日本連盟）

日韓ボーイスカウト・ガールスカウト交流事業は平成11（1999）年度より当基金が（財）ボーイスカウト日本連盟及び（社）ガールスカウト日本連盟に事業委託し実施しています。日韓ガールスカウト交流事業は7月23日から8月14日までの間、5グループ93名（中学生80名、リーダー13名）を韓国から招き、実施されました。

韓国ガールスカウト一行は、受け入れを担当した5支部（東京、栃木、新潟、長野、岐阜）を訪れ、夏祭りや自然体験プログラムのほか、学校を訪れ地域の人々と交流し、各支部が企画した地域の特徴を活かしたプログラムで大いに交流を深めました。

特に今年度は「build and better world(より良い世界をつくるために)」をテーマに、世界レベルの問題をともに考えるための討論のプログラムが設けられました。「食育」や「思春期の健康」といったテーマを設定し、日韓のガールスカウトがテーマごとのグループに分かれて話し合い、その結果を他のグループの前で発表し、さらに議論を深めました（ギャザリング）。参加者からは「食品に関する問題や食生活の乱れに関する問題などは、日本だけでなく韓国でも同様に起こっていることに気がついた」などの意見が聞かれました。

日本での滞在日程にはホームステイ

も含まれ、韓国スカウトたちは、各地のホストファミリー宅で日本の家庭生活を体験しました。韓国スカウトからは「異なる生活習慣、家屋の構造など直接触れる良い機会になった」、「言葉は通じないが、人々の生活をじっくり観察したので、日本の文化が少しずつ理解できるようになった」との感想が聞かれました。



ギャザリングの様子（東京）

### 主な日程

栃木県支部（7/23-7/31）	県庁表敬、ホームステイ、那須・日光見学、ジュニアキャンプ参加、日本文化体験など
東京都支部（7/23-7/31）	都庁表敬、ホームステイ、都内見学（国会議事堂など）、茶道体験など
長野県支部（7/26-8/4）	県庁表敬、ホームステイ、キャンプ、辰野町見学、松本市内見学など
新潟県支部（7/26-8/4）	県庁表敬、ホームステイ、長岡祭り参加、新潟市内見学など
岐阜県支部（8/6-8/14）	県庁・多治見市表敬、ホームステイ、名古屋・高山見学、キャンプ、日本文化体験（茶道、鶴飼見学）など



すだれを使って大きなキムバブ（韓国式のりまき）を作っている（長野）

## 日韓高校生交流キャンプ（社団法人 日韓経済協会）

「日韓高校生交流キャンプ」は、日韓の高校生が混成のチームを作り、両国の文化や観光をテーマとしたビジネス事業企画を立案、発表する合宿形式の交流事業です。2004年1月に始まったこの事業は、年に2回開催され、2008年度は当基金委託事業として実施されました。

11回目となる今回のキャンプには、日本側は全国25校、韓国側は27校か

らそれぞれ44名、計88名の高校生が参加、10チームに分かれて都内の研修施設で合宿生活を行いました。

初日は、オリエンテーションや自己紹介プログラムで初対面の硬さをほぐすことからスタートしました。チームごとに、日本語・韓国語・英語まじりで何とか意思疎通を図ろうとする姿が見られました。その後、早速翌日の市場調査の準備にとりかかりました。

2日目は、各チームが都内の繁華街で、自分たちの企画に近い商店の人にインタビューをしたり、街頭アンケートをするなど「市場調査」を行い、事業アイテムを決定しました。

3日目は、終日各チームがビジネス企画を練り、翌日の発表会に向けて広報物の作成、プレゼンテーションの準備など、熱気をおびた作業が続きました。

4日目には、来賓を迎えて「事業発表会」が行われ、各チームが趣向を凝らしてビジネス企画を発表、質疑応答も活発に行われました。審査の結果、最優秀賞は「JK Green Wave Project」と題して環境保護をテーマにしたホテル事業を企画したチームに決まりました。

その後開かれた「JKパーティ」では、

両国の学生たちが歌や踊りなど多彩な特技を次々と披露し、「両国伝統衣装ファッションショー」や「日韓伝統遊び体験」で楽しい時間をすごしました。

最終日には参加者全員で浅草を見学し、名残を惜しみつつ4泊5日間の日程を終了しました。

限られた時間の中で一つの結果を出すべく、時にはチーム内で意見がぶつ

かることもあったようですが、密度の濃い共同作業を通じてメンバー同士の相互理解と絆が深まったようです。

このキャンプは、来年2月にも舞台をソウルに移して同様の内容で開催される予定です。



発表会に向けビジネス企画を練った

### 主な日程

8月3日(日)	韓国側参加者来日	<p>チームごとに都内市場調査にかけた</p>
8月4日(月)	日韓の参加者がキャンプ会場に集合、オリエンテーション、市場調査準備	
8月5日(火)	チームごとに都内で「市場調査」、会場に戻り事業アイテム決定	
8月6日(水)	チームごとに事業企画・戦略を立案、事業発表の準備	
8月7日(木)	「事業発表会」開催、「JKパーティ」「両国伝統遊び体験」 浅草見学、解散、韓国側帰国	

## 平成 20 年度日中韓青少年交流事業 (財団法人 青少年国際交流推進センター)

9月17日から9月23日の7日間、当基金と(財)日中友好会館が(財)青少年国際交流推進センターへ委託した日中韓青少年交流事業が行われました。日中韓青少年交流事業は2007年8月、温家宝中国国務総理の提案により、第1回事業が中国で実施されました。その後、同年11月の日中韓首脳会議(シンガポール)で、福田総理(当時)が

日本での第2回事業の実施を表明し、開催に至りました。

第2回は事業の総合テーマを、「東アジアの安定と繁栄のために日中韓の青少年の果たすべき役割」と定め、日中韓3カ国の大学生を中心とする青少年総勢300名(各国100名)が参加しました。今回の活動の成果を12月の日中韓首脳会議での提言内容として報告するため、環境、高等教育、文化交流のテーマ別のグループに分かれ、テーマに関する施設の視察や、積極的なディスカッションを行いました。

環境グループでは、リサイクル工場などで廃棄物をリサイクルする技術や企業の環境問題への取り組みを、高等

教育グループでは、都内の高校でリーダーシップの育成に必要な教育について、文化交流グループでは、茶道をはじめとする伝統文化の紹介と互いの文化への理解について、それぞれ現場の見学を通して学び、ディスカッションを経て提言内容をまとめました。

3日目の夕食交流会は、日中韓の参加者全員が集まる最後の公式行事ということで、会場のいたるところでにぎやかに会話を楽しむ姿が見られ、最後に参加者全員で記念撮影を行うなど、盛況な催しとなりました。

その後、韓国と中国の青少年は、地方でホームステイなどを体験し、都内で修了証を授与され帰国しました。

夕食交流会で日中韓3カ国の参加者による記念撮影



### 主な日程

9月17日(水)	到着	<p>山形県米沢市のホストファミリーとの対面の様子</p>
9月18日(木)	オリエンテーション/事前研修、歓迎夕食会 テーマ別ミーティング、全体会 課題別視察 (環境グループ) 株式会社リーテム、パナソニック東京センター、JFE環境株式会社 (高等教育グループ) 慶応義塾大学付属高等学校、明治学院大学付属高等学校、早稲田大学付属高等学校 意見交換会 (文化交流グループ) スポーツ交流	
9月19日(金)	ディスカッション(環境グループ・高等教育グループ) 課題別視察 (文化交流グループ) 裏千家東京道場 夕食交流会	
9月20日(土)	地方プログラム(ホームステイ)	
~21日(日)	【山形県】【熊本県】【近畿エリア】	
9月22日(月)	都内見学、修了証の授与及び歓送夕食会	
9月23日(火)	帰国	

韓国と日本が、有史以前から深く関わり合い、交流を綿々と続けてきたことは、今更言うまでもない。ところで、昔の両国の人たちは、いかにしてコミュニケーションをとってきたのだろうか。公の場では、漢字・漢文を用いた意思疎通が図られたといわれているが、それ以外に、互いの言葉を習い、善隣友好に役立てたことを、あなたはご存知だろうか。

## 倭学資料と朝鮮資料

『三国史記』によると、新羅は、「倭典」（後、621年に「領客典」と改称）という職制をもうけ、日本人の接客に当たらせていたことがわかる。また、朝鮮王朝では、高麗末からあった「司訳院」を改め、漢学・蒙学・清学などと共に倭学（1416年）を設置し、教授・生徒らに日本語の教育・学習に従事させていた。一方の日本も、『日本後記』の弘仁条（812年）によると、「新羅訳

語」が置かれ、新羅語が教育されていたことが窺えるが、その後も、江戸時代の1727年に雨森芳州らによる「韓語司」が開学するなど、主に対馬を中心に韓国語の学習・教育が行われていた。

その際に用いられた書物、特に、朝鮮王朝・江戸時代に互いの言葉を学習・教育するため編纂された書物を、韓国語史・日本語史分野ではそれぞれ倭学資料・朝鮮資料という。この資料群は、韓国語・日本語共に歴史的变化の姿を反映していることなどから高く評価されているが、これらには韓国語と日本語の対訳が付してある場合が多く、両者の比較による韓日対照言語学的な研究にもつながる可能性も高いとされている。

その主なものに、『捷解新語』『交隣須知』『倭語類解』『隣語大方』などがある。朝鮮資料の白眉とも言われる『捷解新語』には、ほぼ同じ内容を持ちながらも時代、体裁、性格を異にする刊本数種が今に伝わっている。それらに表われている言語事象を対照比較する

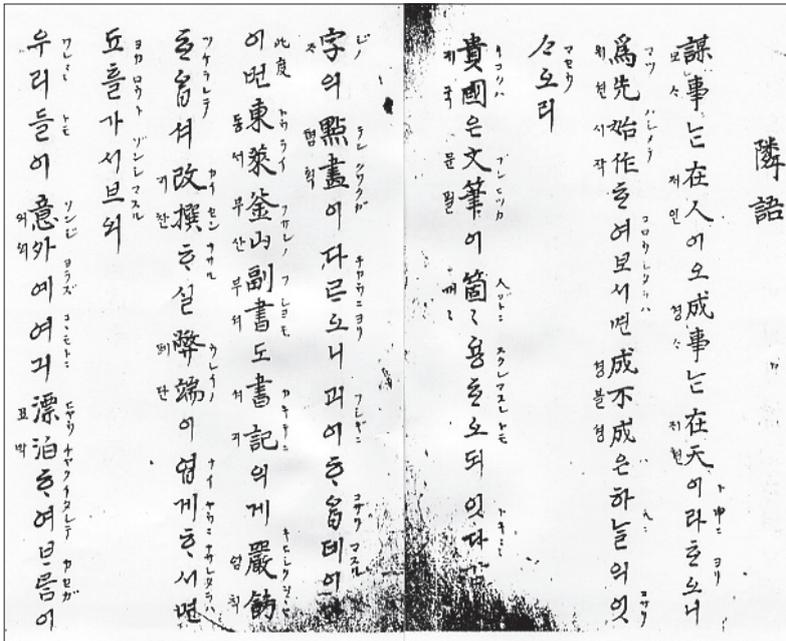
ことにより、様々な言語変化の究明に役立てようとする試みが従来からなされ、その結果には刮目すべきものも多い。

『隣語大方』なる書も、同じく幾種類もの伝本が、韓国と日本の双方に現存している。その主なものとして、ソウル大学中央図書館奎章閣などに収蔵されている「朝鮮刊本」（1790年刊）、外務省蔵版の「明治刊本」（1882年刊）、筑波大学付属図書館蔵の「筑波大本」（1751年写？）と京都大学文学部言語学研究室蔵の「京都大本」（1859年写）などがあるが、『捷解新語』以後の倭学（朝鮮）資料の動きを検するに有益である。しかし、『隣語大方』は、その存在は早くから知られていたものの、成立事情が複雑であること、諸伝本間の関係についても詳しく調査されていないことなどから、さほど注目されていなかったのが実状であった。筆者は、この『隣語大方』を日本語史・韓国語史の研究に積極的に利用する価値があると考え、研究を重ね、その成果をいくつか発表してきた。

## アストン本『隣語大方』

ところが、最近、目録などでは以前から存在が知られていたものの、その実物の確認が長くなされていなかった、ロシアの東方学研究所サンクトペテルブルグ支部に収蔵されている「アストン本」が、世に公表された。この資料名に冠してある「アストン」とは、漢字名を阿須頓とする William George Aston (1841-1911) のことであるが、1864年に英国領事館通訳生として来日し、その後兵庫（現在の神戸）領事を歴任し、さらに1884年か

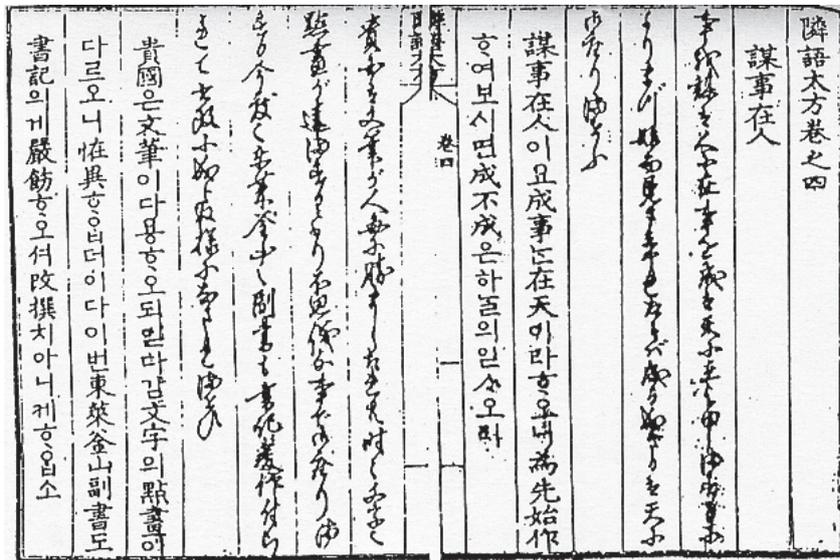
アストン本  
『隣語大方』冒頭



ら86年までは朝鮮で最初の英国総領事を務めた人物である。彼は、後に『日本書紀』を英訳し、また『A History of Japanese Literature』と『Shinto, the Way of the Gods』を執筆出版するなど、サトウ(Sir Ernest M. Satow)、チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)と並ぶ卓越した日本学者であったが、サトウの証言からは熱心な古典籍の収集家でもあったことが明らかになっている。彼は、日本の古典籍だけではなく、朝鮮や中国の漢籍なども数多く所蔵していたが、彼の死後、その多くは英国のケンブリッジ大学図書館に収蔵されることになり、朝鮮本を主とする朝鮮関係書籍はロシアの東方学研究所サンクトペテルブルグ支部に収蔵されることになったのである。最近日の目を見た「アストン本」『隣語大方』も、その一部である。

さて、朝鮮(倭学)資料における日本語・韓国語は、概ね日本語史や韓国語史の変化を反映しているとみられるものの、その資料的特殊性から起因するらしい特異な言語様相も見受けられる。たとえば、『捷解新語』『隣語大方』における日本語の原因・理由の表現形式などは、表面的には単純に「口語から文語的表現への変化」のように見えるが、その背後には口語史の反映が見受けられる点などである。

ところが、同じ書名を持ち、内容もほぼ同じである、『隣語大方』の諸本だけに限ってみても、巻序、項目の異同、項目順などの体裁はもちろん、日本語・韓国語の姿や両言語の対訳様相なども、諸本によって様々である。これらの事象が究明されてこそ、『隣語大方』が真の言語史資料たり得るわけであるが、今までの研究により、諸本間の関係はある程度わかってきた。そ



朝鮮刊本『隣語大方』卷四冒頭

こでの「アストン本」の発見は、従来の研究成果を再度検討する必要性をもたらしたと言わざるを得ない。

「天保十二辛丑年二月二日浦瀬岩次郎」という識語をもつ「アストン本」(1841年)は、大まかに見たところ、その巻序は「明治刊本」と類似しており、項目の面では「京都大本」と似通っている。しかし、本文の一行目に「隣語」という内題をもっていること、一丁十行という形式をとっていることは「筑波大本」と同じであるなど、いままでに知られていた異本とは、違う様相を呈していることが見受けられる。それは、「アストン本」の言語事象にも当然見られると思われるが、今回の研究により、ある程度は明らかになるだろうと期待する。

### 民衆生活史としての価値

なお、『隣語大方』には、言語史資料としてだけでなく、日朝交流史、民衆生活史などの研究資料としての価

値も大いにあると思われる。たとえば、「アストン本」には、「羊の糞を黒焼にして鬘の禿げた所に付ければ毛が生える」とか、「火に焼けて爛れた所には胡麻の油を塗ればよう御座る」といった内容などが随所に見られるが、そこからは当時の生活ぶりなどを窺い知ることができると思うからである。今後、他学問分野での利用も期待されよう。

#### PROFILE

シン チュンキュン



全北大学校人文大学日語日文学科副教授。専門は日本語史、韓国語史。立命館アジア太平洋大学講師、全北大学校専任講師・助教授を経て現職。九州大学客員教授(韓国国際交流財団韓国学派遣教授)を歴任。2008年10月から招聘フェローとして九州大学に滞在中。

# 横浜・仁川都市間交流「次世代を担う子育て支援」

(財) 横浜市国際交流協会 事業課長 大戸澄子

去る10月9日(木)から13日(月)にかけ、韓国・仁川市より10名の交流団が横浜市を訪れました。交流団のメンバーは今回のテーマに沿い、区役所で保育に関する業務を担当する職員で、ほとんどの方が初めての日本訪問です。

## 共通点が多い両市の交流

今回の交流は、仁川国際交流センターとの交流が発端でした。仁川国際交流センターは2005年10月に設立されました。同年11月には同センターの調査団が横浜を訪れ、すでに27年の実績を持つ当協会の国際交流・協力、在住外国人支援などに関する調査、意見交換などが行われ、さらに2006年、2007年には、当協会が開催している国際交流・国際協力の総合イベント「横浜国際フェスタ」に出展したことを機に、交流がスタートしました。

仁川市は首都ソウルから28キロ、電車で1時間の距離にある港湾都市で、ソウルのベッドタウン、さらに市内に中華街を擁するなど、横浜市と共通点の多い都市であることも交流を後押ししました。

当協会は、1981年に設立されて以来、他都市との交流は海外の八つの姉妹都市を中心に実施していましたが、数年前から都市が抱える具体的な課題・テーマを決め、相互の市民にとってより役立つ交流を実施しています。



横浜市港南区地域子育て支援拠点「はっち」での意見交換

## 「子育て支援」をテーマに

今回の交流のテーマは「次世代を担う子育て支援」としました。近年、日本・韓国ともに出生率が著しく低下し、少子化対策が重要な政策課題となっていることから選ばれたテーマでもあります。

プログラムは、①横浜市が取り組んでいる子育て支援施策 ②施策を実践している施設の視察 ③施設スタッフとの意見交換・交流会の開催 ④ホームステイなどで組み立てられました。

横浜市が現在特に力を入れている、子育て中の母親を支援する「地域子育て支援拠点」は、核家族化が進む子育て家庭のために、親子が遊びながら交流できる場の提供、子育ての不安や悩みの相談、子育て情報の提供、さらに子育て支援者のためのネットワークづくり、研修会の実施などを行う機能を持ち、また「親子の居場所」は、市立保育園の一室を利用して開設されている点が特徴です。

これらの施設を見学した後、保育園や各施設のスタッフとの意見交換会が行われました。日本では核家族化が進んでいるためにこのような施策が必要ですが、韓国では、日本ほど核家族化は進んでおらず、大家族の中での育児なので子育て中の母親が孤立化したり、相談する人がなく育児ノイローゼになる例などはあまりないとのことでした。

また、これらの施設の運営をNPOなどの市民グループが行っていることや保護者の自発的な関与に驚いたようでした。

韓国では、保育料の補助、保護者教育など支援の拡大を進めていますが、横浜市ではむしろ直接的な支援を減らし、市民が取り組む活動への支援に力



横浜市立港南台第二保育園訪問

を入れていることに、強い関心を持ったようでした。

このように、子育ての背景が異なっているため、問題解決へのアプローチは違ってくるかもしれませんが、韓国と日本の育児問題の相違点がよくわかり、とても意義深く、学ぶべき点が多かったとの感想が多数寄せられています。

また、2泊のホームステイでは、日本の文化を体験するとともに、受け入れ家庭の暖かく細やかな配慮に感動し、また必ず来たいなどの声が聞かれました。

## 今後に向けて

仁川市との交流は今始まったばかりであり、メンバーも行政職員が中心の交流団でした。今後は市民や市民グループを中心とした交流が必要ではないかと考えています。

今後もこの交流を継続し、民間ならではの交流を育てていきたいとの思いを強くしています。

### PROFILE

おおと すみこ



横浜市役所職員として、教育委員会でスポーツによる国際交流事業、市政百周年記念誌「横浜スポーツ百年の歩み」の編集、横浜市立大では海外の大学との交流・研修、港湾局ではポートセールスなど、国際交流に関わる仕事に携わる。2008年4月より現職。

# 日韓文化交流基金事業報告

本号では、2008年度第2四半期（2008年7月1日から9月30日まで）の実施事業を紹介します。

## 1 第24回日韓文化交流基金韓国訪問団

当基金の役員および文化関係者からなる「日韓文化交流基金韓国訪問団」は、毎年1回韓国を訪問し、韓日文化交流基金をはじめとする韓国側関係者や各界要人への表敬訪問、韓国在住の日本人との懇談などを行っています。24回目となる今年は、8月26日から29日にかけてソウル、大田、忠清南道（公州、禮山）を訪問しました。

### 日程

8月26日	ソウル到着 重家俊範駐韓大使表敬、高橋妙子公報文化 院長によるブリーフィング 李洪九韓日文化交流基金会長主催歓迎晩餐会
8月27日	ソウルジャパンプラブ役員との朝食懇談会 柳仁村文化体育観光部長官表敬 訪日、訪韓フェローとの昼食懇談会 藤村会長主催答礼晩餐会／ 第9回「日韓文化交流基金賞」授賞式
8月28日	忠清南道公州到着 公州国立博物館見学 武寧王陵見学 基金フェローシップ経験者との晩餐会 (於 大田)
8月29日	修徳寺見学 帰国

### 参加者

団 長	藤村正哉	(財)日韓文化交流基金会長 (当時) 三菱マテリアル(株)名誉顧問
副団長	内田富夫	(財)日韓文化交流基金理事長 元駐スウェーデン大使
顧 問	竹内宏	(財)日韓文化交流基金評議員 (財)静岡総合研究機構理事長
顧 問	饗庭孝典	(財)日韓文化交流基金評議員 東アジア近代史学会副会長
団 員	小山敬次郎	(財)日韓文化交流基金理事 嘉悦大学産業文化総合研究所所長
団 員	榎崎正博	(財)日韓文化交流基金理事 前関電産業(株)社長
団 員	田中勲	(財)日韓文化交流基金理事 (社)日本自動車工業会特別参与
団 員	梅田博之	学校法人廣池学園顧問・ 麗澤大学名誉教授
団 員	前田二生	指揮者
団 員	大竹洋子	東京国際女性映画祭ディレクター
団 員	阿部孝哉	(財)日韓文化交流基金理事・事務局長 前駐瀋陽総領事、元駐釜山総領事



韓日文化交流基金主催歓迎晩餐会



修徳寺見学

## 2 青少年交流事業

### 訪日団

団体名	団長	計*1	男*2	女*2	期間	訪問校
韓国高校生訪日研修団 (第5団)	李明九 泰陵高等学校 校長	53	23	26	9/23 - 9/29	神奈川県立厚木西高等学校
韓国高校生訪日研修団 (第6団)	金容達 禿山高等学校 校長	53	19	30	9/23 - 9/29	神奈川県立高浜高等学校



高浜高校で介護実習の体験をする韓国高校生（第6団）

\*1 引率含む \*2 生徒のみ

### 訪韓団

団体名	団長	計*1	男*2	女*2	期間	訪問校
岐阜県中学生訪韓研修団	蒲貞憲 荘川中学校 校長	54	26	24	9/21 - 9/27	京院中学校（ソウル）



京院中学校訪問の様子（岐阜県中学生）

\*1 引率含む \*2 生徒のみ

## 3 維持会員

2008年7月1日～9月30日の期間に、特別会員1名、個人会員37名の方に維持会員制度にご加入いただき、48万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

### 特別会員 1名

内田富夫（2）

### 個人会員 37名

秋鹿敏雄	李炯喆	市吉則浩	井上和枝	猪俣道也	神田外語大学
北出明	金容媛	小泉勇治郎	小針進	齋藤美智子	佐々木隆爾
徐正基	杉森憲一	高島淑郎	鄭仁豪	月脚達彦	辻星児（2）
鶴園裕	中山隆夫	芳賀徹	長谷川由起子	羽鳥敬彦	林和彦
平田辰一郎	平山龍水	広瀬貞三	藤本幸夫	藤原祥二	裴光雄
黛まどか	三谷太一郎	尹光鳳	余田幸夫	和田純	渡邊武

匿名希望 1名

## 平成21（2009）年度 公募プログラム案内

### 人物交流助成

2009年度（2009年4月～2010年3月）実施事業に対する人物交流助成の申請を、2009年1月5日から1月30日まで受け付けます。

### 学術定期刊行物助成

2009年度（2009年4月～2010年2月）の学術定期刊行物助成の申請を、2009年2月16日から2月27日まで受け付けます。

\*人物交流助成、学術定期刊行物助成とも、年1回の募集となります。詳しくは募集要項をご覧ください。募集要項・申請書は当基金ウェブサイト <http://www.jkcf.or.jp> からダウンロードできますので、どうぞご利用ください。